



奥列後二年記

伊勢丹屋本合
借而蔵之
全

イ曾
600
133



門 曾 4
番 600
卷 133



奥列後三年記序

曲亭文庫

朝家母文成乃二道ありたりひ小政理
と投く山門と顯密の教宗ありとこれ
龍抄成りしは是る所代明時乃は法業と
了りし神明佛化乃余化ありと
事なりと志す御本朝神武天皇二十六年
代清和天皇は御子貞純親王は代乃後胤
伊豫守源賴義朝臣乃攝關隆興守
家朝臣八幡友と号す御院乃御宇
保元平治の乱の御事なりと

今もあつて又海新のり古もあは羨歌惟
うそは殿徳を伴がけらん世と入る知所
行ゆゑもあははるゝあゝん事と思ふ後
漢れ二十八将書形と後やう書母あは来
朝賢登障子名士と世京宸殿母画せり
朝故中今は徳を潤せりしむる所なり是
等れ来由ゆはるゝは畫畫東塔南苔の
流儀とてそと切を流しれ言哉梅の稿
とてあ事一物も也思言切字乃分とてあ
と價作乃忘の中めはるゝを捨く永日

園新れ家一實をせあゝとああ端乃るれ
丹とららゝとてをせりてほひと朝風月
乃吟詠もさゝらん後京精細れ
朝とてそと丹青れ記春常母とてあり旅
筆筆後あ思安今石れ治古母あはるゝ
波是とてそと益行りあ少ああゝ感せ
とあや干時貞和三年法京権僧都玄慧
一吞れ危命あゝと大纏乃少序と就と
とあ事とあり

奥列後三年記上

永保此頃奥六郡がうちに清原義衡と
その者あり其子太師貞が子結子守府
將軍貞則が孫あり真衡が一家八重と
出羽の國山が乃任人あり康平乃頃山
源頼義貞任家任とらし時貞則一万余
人乃境我奥とらし清原が加らし其
貞任とらしとらし其の
貞則が子孫六郡とらし其の
これ其の貞任家任が先祖六郡乃ら

かゝんてく走海。法剛家ひししきあゝ
徳ありふだうくまゝいかにぬ
高徳あふれこひとぬだういかにぬ
てあやうき福くきと集あゝ我が中州をまか
くめ又考武がゆゑゆらんて軍ごらま
秋葉とんゆゑ一永保三年の秋源義家
相良隆國もゆゑゆゑゆらんてあゝ
まがり我ひ入事とあゝ新司と興會應せ
ひまるといあひに日射とて事一らり日毎ふ
上馬みすためんりりあゝの外金部りゆゑ

信市乃ららひ教とてあゝいかにぬ
圓司我助言とてゆゑゆゑゆらんてあゝ
意とてげんてあ考文とてめんてあゝいかにぬ
ちと我館とてあゝゆゑゆゑゆらんてあゝ
乃圓行むひぬ
真徳おぬ我ぬとてゆゑゆゑゆらんてあゝ
さゆれとてあゝいかにぬとてあゝいかにぬ
それ時圓司は節もいかにぬ乃圓は任人若友
たまたゆげんてあゝいかにぬとてあゝいかにぬ
年とてあゝいかにぬとてあゝいかにぬ

ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら
 ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら
 ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら
 ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら
 ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら

此本文脱
 高尚考

忠奇云後
 三年合戦
 繪トエラ
 世トエラハ
 此文ヨリ
 アリ

史綱の國司遊つてあまがら
 みちれ國司の御成りつてあまがら
 ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら
 ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら
 ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら
 ちてあまがら籠居てはつたあまがら
 素後とありてはつたあまがら

るを〜軍軍はさよの底を〜の者
とも〜相模のあれ佐人徳倉は指
五部景正といふ者ありの先祖よりゆめを
うればさよのあつ年が六十六年
して大軍入りしむらりの命をさよ〜
か小間^{ていろう}へ御来め〜右北門と射させ川首
と射は〜ぬ〜のぬ〜の練舟入板舟村
舟〜とぬ矢成ありうけ〜あ入り矢成村
歌と射〜の河〜と後志のぐら河〜と
とぬれ〜景正の命〜のけ〜ぬ

ぬ〜ぬ回廻はさよの三浦乃平を師為次
と〜のあつ〜のあえ〜つれ者あり
は〜ぬれとされぬ〜景正が願とぬ
〜矢成ぬ〜景正のあ〜刀を授
ては景正のあ〜のあ〜海あり
う〜景正が願とぬ〜のあ〜
か〜のあ〜景正のあ〜景正
あ〜のあ〜景正のあ〜のあ〜
い〜のあ〜景正のあ〜のあ〜
あ〜のあ〜景正のあ〜のあ〜

國乃政事とてめくせしにほえよめとて
の春夏化事ゆく出立て秋九月
相方務れ時をせし井く今活れ鼓一鼓て
て母出音大之事又光任半ありて相果と居て
國對小とて海の胸をさかえよとてお軍乃
馬の響母とての兒洞とのごひいあて年
乃と心とての事ハ義一とて作方の子生れ
う今日我君と他一ありんとしてん御ま
兒事とてひらきあてんて人かあえ
まがり泣母とて

お軍此軍とて今降入相母とてつと
ぬまを度れとて山野我のせり一
乃解屋とてとてふり厚陣忽ち
破とてはるにちりともお軍とて
あはを身とてあてとてあてとて
てお道とてあてとてあてとて
うちり二千倍勢入はとてあてとて
えとてとてあてとてあてとて
とてのこも我村あて教をほとて
らとてぬ義衆れ胡信とて年字活及入

糸一々負任させめどいひまゐりまゐり
原庄之房郷あらしめし〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし
乃合戦れ道と志し〜 徳景のいひし

武衛が〜めめ海海〜とた〜と
いひし心

若野も仲時

厚波〜と

海海海海

海海海海

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

けうぎに武衛と云はれしと申すは
身よりけうぎの御方と申すは
四段と一人けうぎの御方と申すは
かたはらけうぎの御方と申すは
うんぎの御方と申すは
と云はれし御方と申すは
乃かりあ^衣と申すは
たうりとなはれし

御方と申すは
と入と申すは

あひひの御方と申すは
道と申すは
てちちと申すは
出合と申すは
てありと申すは
まじと申すは
なまじと申すは
まじと申すは
と申すは

あゝみどもかたて〜我あまた一糸もあまのひも
て死んてはくささ〜糧料と〜といふゆも
志と東一海の上海〜〜我者〜は〜せあ
とぬだの〜馬〜も〜四府〜の〜城〜中〜航〜舟〜の〜ぞ
〜と〜先〜り〜女〜少〜言〜ま〜つ〜る〜ゆ〜〜糧〜を〜む〜ら〜く〜出
〜其〜の〜軍〜に〜い〜か〜道〜を〜あ〜〜と〜通〜し〜度〜は
〜と〜と〜ん〜く〜給〜ひ〜て〜又〜あ〜あ〜む〜ら〜の〜り〜く〜ぞ〜お
〜秀〜武〜が〜軍〜中〜や〜〜け〜り〜は〜あ〜れ〜げ〜と〜女〜言〜ア
〜諸〜首〜と〜さ〜ん〜と〜〜の〜軍〜と〜の〜也〜と〜〜秀〜武〜が
〜し〜ら〜〜目〜れ〜あ〜女〜殺〜し〜ゆ〜〜と〜ら〜ら〜ば〜強〜く〜而〜の〜執

人定ぬ〜路〜と〜〜志〜と〜ば〜城〜中〜の〜糧〜積〜と〜
〜は〜い〜あ〜つ〜は〜ん〜で〜あ〜あ〜れ〜あ〜〜と〜あ〜り〜〜の〜事
〜と〜あ〜ひ〜ら〜あ〜と〜〜と〜〜行〜け〜あ〜つ〜と〜と〜せ〜
〜前〜あ〜ん〜事〜と〜極〜く〜け〜ら〜ら〜は〜れ〜推〜女〜言〜ア〜と
〜城〜中〜の〜法〜と〜あ〜の〜も〜ら〜も〜妻〜あ〜子〜と〜も〜あ〜り
〜城〜中〜あ〜あ〜ば〜と〜あ〜〜と〜と〜〜の〜言〜ひ〜〜妻〜あ〜子〜に
〜あ〜〜と〜せ〜ぬ〜事〜と〜ら〜ら〜海〜〜む〜り〜〜と〜時〜中〜と〜極〜
〜死〜ぬ〜ん〜が〜積〜と〜ら〜ら〜ば〜城〜中〜の〜糧〜と〜〜と〜を〜た〜れ〜あ〜り
〜と〜ら〜の〜軍〜〜と〜は〜あ〜〜と〜ら〜ら〜ら〜〜と〜ら〜ひ〜〜と〜は〜あ
〜而〜れ〜あ〜り〜と〜ら〜ら〜も〜目〜れ〜あ〜れ〜前〜中〜と〜は〜は〜と〜

とらへてゆく一城戸とてあらはれしはゆへに
者なり

奥列後三年記下

藤原北資貞道ハ將軍乃とてに月志とて紀
ゆきゆの年よりけしに十二の月とて將軍ハ陣
中ゆかりとてゆひる所とてありて事なり
ゆき半たるとにぬ軍北資貞道と記しとて
氏御家御領とてありてとてゆき半とて
ゆき半とてとてゆかりとてゆき半とてゆき
とてゆかりとてゆき半とてゆき半とてゆき
ゆかりとてゆき半とてゆき半とてゆき半
ゆかりとてゆき半とてゆき半とてゆき半
ゆかりとてゆき半とてゆき半とてゆき半
ゆかりとてゆき半とてゆき半とてゆき半

新島津の事そのありしにあらんはるる人をも
神ありとあゆえりてはるるをたつたりの
あつたつとていとも天道の軍入りむけしとて
けあひるぶあやあつたつとてい

氏郷家郷合名物意くそく寛治五年十一
月十四日乃夜終末所おもむけ博中乃家と
そとあつたつていり種れ中あつたつてい
事地獄なることいふ小いそつたつてい
なちあつたつてい將軍入る。そつたつてい

つたつてい
あつたつてい
そつたつてい
あつたつてい

あつたつてい一人あり氏郷あつたつてい博中あつたつてい
りあつたつていあつたつていあつたつていあつたつてい
つたつていはあつたつていあつたつていあつたつてい
千仕おれとて生高あつたつていあつたつていあつたつてい
あつたつていあつたつていあつたつていあつたつていあつたつてい
あつたつていあつたつていあつたつていあつたつていあつたつてい
あつたつていあつたつていあつたつていあつたつていあつたつてい
あつたつていあつたつていあつたつていあつたつていあつたつてい
あつたつていあつたつていあつたつていあつたつていあつたつてい
あつたつていあつたつていあつたつていあつたつていあつたつてい
あつたつていあつたつていあつたつていあつたつていあつたつてい

平家物語の巻末に「平家物語の巻末に」

此記不知何人作也脩史君平宰相忠雄
郷所藏本圖記三卷上卷土御門文殿寄
人仲直中卷持明院左少將保脩下卷世
尊寺從三位行忠各写其詞焉圖則畫工
飛彈守惟久筆也予得偶見左飲賞写而
留焉其間假字遣等一隨其本真字以真
字写假字以假字写不更一字而又一枚
了須為證本也然彼以假字文舛行字此
以片假字文真字唯是之換耳
此記詞簡古而理較著人僉曰平家物語
下出太平記上予於此記亦云出平家上

然^レ只^レ讀^テ至^下拔^ニ千^一任^カ之^レ舌^ヲ踏^キ武^ノ衡^ノ之^レ頭^ヲ暴^ク刑^ス
有^リ害^ニ道^ノ義^ノ所^レ不^レ滿^ニ予^ノ心^ニ也
此^レ記^ノ卷^ノ首^ノ舊^ノ本^ニ已^ニ脫^ス惜^カ矣^ナ史^ノ之^レ闕^ク文^ナ也^ナ而^{シテ}
今^レ欲^ク補^フ巨^ノ獲^ニ宅^ノ本^ノ姑^ク埃^ト異^ト日^ノ洽^ク聞^ク之^レ士^ノ之^レ
爲^ニ焉^ク云^フ余^ノ

太^ノ後^ノ三^ノ年^ノ之^レ記^ノ以^テ數^ノ本^ノ校^ノ合^ノ畢^ス

卷^ノ卅^一

